

## 海洋と繪畫と

黒田清輝

◎西洋畫の風景畫の中でも位置のいゝ場所を寫したり、氣象の變化を描いたりする外に、海の畫といふと自ら一つ、専門の爲事しごとのやうになつてゐる。畫家といふ以上、人物でも風景でも何でもやれさうなものであるが、やはり人物畫家は人物畫家、風景畫家は風景畫家、而してまた風景畫家といふ中に野山の風物を描くもの、建築物を主にして描くもの、乃至海洋を専門にするものといふやうに細かい區別がある。各得意とする所に専らんとするのは假りにも技術と名のつく以上、それ／＼専門家としての工夫鍊鍛を要するからである。

◎私のこれまで描いた風景畫には割合に海の畫が多かつた。山野の風物を描いたものよりも海岸の景色が一番多い。それといふのが天性海洋に興味をもつ所爲もあらうが、學校の余暇などに一寸遊びに行く場所が大抵海濱であつた爲めでもあらう。

◎西洋の畫家にしても海の畫を好んで描く人にはどうも海濱に縁のある人が多いやうだ。平生海に親しみ海を愛する人であるから自然波の一起一伏にも細心の注意が及ぶのである。而して一口に海の畫といふ中にも、いろいろ違つた、専門といふ程でなくとも畫題の撰び方が人によつてさまざまである。この中でも最も多いのは海邊の生活を主にして描いたもの、それから汐干狩——といつても日本のやうな遊山的のものではなく職業としてある。暴風に難破した船の救助に赴く光景も普通であるし、時化の折に沖に出た夫の船を待ち託びて海濱に

立ち盡くす漁師の妻子を描いたものや、ずっと變つて大洋の荒浪を描いたものもある。その他に多いのは海戦の圖であるが、これは海洋の知識といふよりも寧ろ軍事上の知識に俟つ所の多いものである。

概して言へば西洋の海の畫には海上の生活を描いたものよりは、海濱の生活を描いたものが多いやうである。

◎ 西洋の有名な海洋畫で一寸記憶に残つてゐる二三の作を挙げると、フランスではルーヴル美術館にあるドラクルワアの『ドン・ジュアンの小舟』——これは必らずしも海を主にしたのではない、大勢人の乗つた小舟の荒浪の上にとゞよふ様子を描いたものである。また波の畫でクウルベの作が最も有名である。何れも十九世紀初期の人々である。その後自然派の畫風が榮えて、寫生的に海の畫を描く人も多くなつたが、特に海の畫の傑作として撰ぶほどのものは記憶しない。毎年のサロンなどにも盛に海洋畫は現はれるが近頃で有名なのはオランダのメスダッグの海岸の風景畫であらう。

◎ 思ふに日本などは、將來西洋に比べて決して劣らない程、數多く海洋畫の作品も現はれる事であらうし、自然傑作もその方面に多く出る事であらうと思はれるといふのは、日本人位海に親しい國民は少いので日本國中、どんな山國に生れたといつても一生海を見ないといふ人はまづ少ないのである。これに反して歐米大陸の奥深く棲んでゐる人が一生海洋に興味をもつ機會を得ずに終るやうなものではないのである。將來西洋畫の技術を應用して種々海洋の違つた情趣を描く人の益々多く出でん事を希望する。

◎ 海といへば一圖に單調なものや、やうに思ふ人もないではないが、海の風光にも四季の變化があり、明鏡の如く氣象の影響をうつして、山野以上に豊富な現象を見せるものである。いかなる事物といへども仔細に眺むれば相

應の交代變化はあるものであるが、その中でも海の景色の變化は何人の眼にも著るしい事は今更云ふまでもない。

◎私自身は特に海について専門に研究したといふ次第ではないが、海を見る度にいつも十分専門の研究材料として面白いものだと考へてゐる。海の畫を描くとすれば氣象の變化に伴ふ波の色や形などに細かい研究を積むのであるから、海洋畫を以て一生の専門とする位の人は自ら幾多、常人の見出しえぬ微妙な發見があるに違ないと思ふのである。これは風景畫ばかりではない、人物を描くにしても始めにまづ人體を組織する筋肉骨格から細かく解剖學的に研究して行かねばならぬやうに、海を描くにも當面の海を觀察するのみならず一々精しくその海と天候との關係、周圍の土地の位置、熱帶溫帶寒帶等緯度に依つて太陽の光線の違ふ有様、波の打ち方、波の色合、凡べてに亘つて人體と同様の精密な研究を試みられねばならぬ。また形や、色の研究ばかりでなく、春の海にどこかな心持を味はせ、秋の海に寂しい姿を現はし、または壯快なとか、凄味のあるとか、凡べてさういつた人間の生きた感情氣分を波の現はし方に出して見せる事も自由であらう。

◎これは畫の方の事ではないが、私は嘗つてフランスのモウパッサンの『水の上』シユルロオと題する小説を讀んで、ヨットに乗つて地中海を旅行する記事を大層面白く思つた。日本のやうな海の近い國ではあの小説に書いてあるやうな旅行をする事も自由である。あの小説に書いてあるやうな船に乗つて自分の意の赴くまゝに近海を漕廻つて、氣に入つた風光に接すれば興に乗じて寫生を試みる、さういふ旅行の趣を味はつたら面白いであらう。私は海に對してはこの位の愛着心研究心を持つてゐるのである。將來、海に十分の趣味をもつて、専門の研究をこれに捧げる人があつたら、世界に誇るべき海洋畫の傑作はいくらも日本人の手に依つて作られる筈だと考へる。 『新日本』一五明治四四年八月